



2026 AUTOBACS SUPER GT RD.4 FUJI GT 300KM RACE REPORT



SUPER GT 2026 第4戦 富士300km レースレポート

開催日：公式予選 8月1日(土)／決勝 8月2日(日)

開催地：静岡県 富士スピードウェイ

<予選レポート>

前回の第2戦富士は、3時間という長丁場のレースということもあり、富林勇佑選手と藤原優汰選手に加え、新加入の久保凜太郎選手の3名体制で挑んだ。しかしながら、指定外燃料の使用により重大なミスを犯し、予選タイムが抹消となり、最後尾からのスタートを強いられてしまった。再発防止に努めるとともに、決勝では切り替えてチーム全員で力を合わせて順位を挽回。本来のポテンシャルを十分に発揮しきれなかったという課題はあったものの、同じ舞台である富士で一発逆転すべく、入念に準備を進めていた。第3戦マレーシアの延期を受け、シーズン中では稀な3カ月のインターバルを挟み、8月1～2日に開催された「2026 AUTOBACS SUPER GT Round4 FUJI GT 300km RACE 夏休みスペシャル」へと臨んだ。

今回は300kmレースということから、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は、富林勇佑選手と藤原優汰選手の2名体制で挑んだ。前戦から約3カ月のインターバルを活かしてドライバー、メカニック、エンジニアが幾度となくミーティングを重ねながら、クルマのセットアップや戦略を見直してきた。その積み重ねが実を結び、持ち込んだベースのセットアップは走り出しから好感触を示した。そのため、公式練習では大きな仕様変更を行うことなく、決勝を見据えたレースペースの確認を中心に実施。藤原選手はユーズドタイヤで14周を走行し、ベストタイムは1分40秒389を記録した。一方の富林選手はニュータイヤを装着して予選シミュレーションを実施し、1分39秒038をマーク。総合15番手で公式練習を終えた。チームは得られたデータをもとに細かなアジャストを施し、公式予選へと臨んだ。

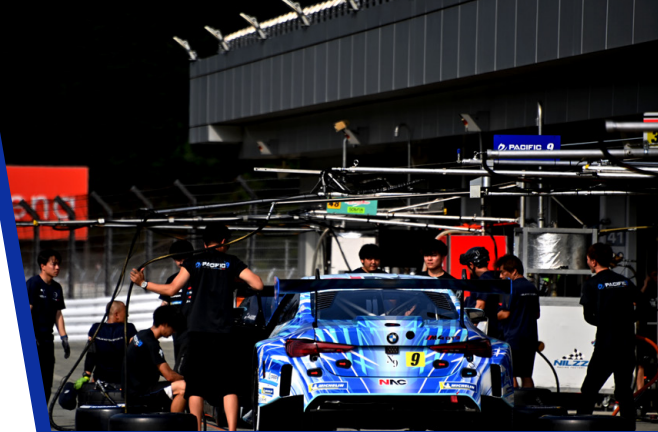
朝から強い日差しが照りつけた富士スピードウェイでは、公式練習の後にピットウォークを挟み、公式予選の開始時刻を迎えた。午後にかけて雲が多いものの、気温32度／路面温度45度

と体感では数字以上の蒸し暑さが感じられた。14時20分からスタートした公式予選、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」はQ1 B組に出走し、冨林選手がアタックへと挑んだ。まずは4周目に1分38秒140をマークすると、連続アタックで自己ベストとなる1分37秒634で5番手につける。チェッカーラップでライバルたちのタイムアップにより、7番手へと順位を下けたが、開幕戦以来となるQ2進出を確たるものにし、しっかりと藤原選手へと繋げた。冨林選手は予選を終えて「今回持ち込んだベースセットアップは、チームみんなで時間をかけて考え抜いたものです。それがしっかり結果につながり、Q1を突破できたことは良かったです」と振り返った。

そして、いよいよグリッドを決めるQ2は藤原優汰選手がアタックを担当。公式練習からGT300専有走行まで、決勝を見据えてユーズドタイヤでレースペースの確認に徹していたため、ニュータイヤでのアタックは今大会で初めてという"ぶっつけ本番"での挑戦となった。それでも、これまでの経験を活かして丁寧にタイヤへ熱を入れ、4周目に1分37秒697をマーク。さらに翌周には1分37秒510までタイムを縮め、自己ベストを更新する力強いアタックを披露した。最後のアタックでは惜しくもタイム更新には届かなかったものの、13番グリッドを獲得。新車投入後の9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」にとって、予選最高位というベストリザルトを手にした。この結果は、ドライバーの力走はもちろん、開幕2戦から積み重ねてきたセットアップの方向性が正しかったことを証明するものでもあった。ドライバーとエンジニアが何度もミーティングを重ね、中日本自動車短期大学(NAC)のメカニックを含めたチーム全員で準備を進めてきた努力が形となり、ピットには自然と安堵の表情が広がる。決勝に向けた手応えと自信を胸に、チームは良い雰囲気のまま翌日の300kmレースへと臨んだ。

<決勝レポート>

迎えた決勝日。午後から天候が崩れる予報が出ていたものの、富士スピードウェイには朝から青空が広がっていた。ウォームアップ走行まではドライコンディションが保たれていたが、スタート進行中には突如として雨雲がコース上空を覆い、大粒の雨が降り始める。これにより路面は一気にウェットコンディションへと変化し、スリックかレインか、タイヤ選択の判断を迫られた。9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は、雨は一時的なものでレース中にはドライアップすると予



測し、スリックタイヤを選択。スタートドライバーを務める藤原優汰選手は、刻一刻と変化するコンディションのなかでも冷静にコクピットへと乗り込んだ。すると、迎えたスタート直前、チームが下したタイヤ選択に味方するかのようにそれまで降り続けていた雨が次第に止み、厚い雲の切れ間から太陽が姿を見せた。

その状況下でレースはセーフティカー（SC）先導でスタート。しかしながら、5周目からSCが隊列を離れてスタートが切られると、GT500の車両がホームストレートで大きなクラッシュを喫し、早々に赤旗が提示される事態に。そして約30分間の中断を経て6周目から再びSC先導でレースが再開され、10周目からようやく本格的なレースが幕を開けることとなった。ステアリングを握った藤原選手は、ポジションを維持してスタートを決め、7周目に12番手に浮上すると、集団のなかでも前の車両に食らいついていく。しかし、周回を重ねていくにつれてタイヤが摩耗し、それに加えてライバルとのクルマの特性の違いによって苦しい展開となってしまう。ラップタイムこそ悪くはなかったものの、18周目に13番手に下げると立て続けにオーバーテイクを許してしまい、23周目には16番手までポジションを下げることに。

その状況を打開すべく、チームは29周目にピットインを決断。藤原選手は自身のスティントを終えて、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」をピットへと持ち帰ると、富林勇佑選手へとバトンを託した。再びポイント争いへと加わるべく、メカニックたちは一丸となって迅速かつ正確なピット作業を遂行。ドライバー交代と給油、タイヤ交換をノーミスで終え、9号車をピットアウトさせると、22番手とポイント圏内で復帰した。ドライバー、エンジニア、そしてメカニックとそれぞれが自らの役割を全うし、チーム全員の想いを乗せた、再びポイント圏内を目指して力強くコースへと飛び出していった。富林選手はその想いに応えるかのようにフレッシュなタイヤを活かして、順位をキープさせる粘り強い走りでライバルを追いかけていく。



他車のピットインも重なり、9号車は着実にポジションを回復。44周目には14番手まで順位を押し上げ、ポイント圏内でレースを展開する。10周以上にわたってそのポジションを守り抜いたものの、早めのピット戦略を採った影響でタイヤは徐々に摩耗。さらにレース終盤には、想定以上に気温と路面温度が低下したことでタイヤのパフォーマンスが落ち始め、厳しい戦いを強いられることとなった。それでも富林選手は最後まで粘り強くマシンを走らせ、貴重なポイントを持ち帰るべく全力を尽くす。しかし57周目に1台の先行を許すと、最低限のポイント獲得を目指して懸命に踏みとどまっていた最終ラップ、さらにもう1台にオーバーテイクを許してしまう。あと一歩のところポイント圏内から脱落するという、悔しさの残るチェッカーとなった。

最終的には16位でフィニッシュ。あと一歩でポイント獲得という位置で争っていただけに、チームにとって悔しさの残るレースとなった。しかし、BMW M4 GT3 EVO投入後では最高位でのフィニッシュを果たし、確かな前進を感じられる一戦でもあった。改善すべき課題はあるものの、ベースセットアップの方向性やレースペース、そしてメカニックによる安定したピットワークなど、多くの収穫を得られた。今回収集したデータと経験を糧に、チームは3週間後に控える第5戦鈴鹿大会でのポイント獲得を目指し、さらなるブラッシュアップを進めていくことになる。また、その鈴鹿大会を前に、決勝翌日の3日には富士スピードウェイでテストも実施され、後半戦へ向けた貴重な走行機会となった。チームはテストでも積極的にデータを収集し、さらなる戦闘力向上を図っていく。

今回走行機会はなかったものの、帯同していた久保選手は「今大会では多くのことを学ぶことができました。新しいセットアップを持ち込み、それがどこまで通用するのかを確認する意味でも非常に重要なレースでした。走り出しからフィーリングも良く、今後のベースとなるセットアップが見つかったと思います。ポイントこそ獲得できませんでしたが、月曜日のテストや次戦鈴鹿へ向けて貴重なデータを得られたことは大きな収穫です」と、次戦を見据えて前向きに語った。惜しくもポイントには届かなかったものの、チームが積み重ねてきた準備と努力は確かな手応えとして表れ始めている。今回の悔しさを力に変え、PACIFIC RACING TEAMはチーム一丸となって次戦の鈴鹿大会へと挑む。シリーズ第5戦は8月22日～23日、鈴鹿サーキットを舞台に開催される予定だ。



COMMENT



総監督 小林弘和

今大会も多くのご声援を承りありがとうございました。結果としては16位でポイント獲得まであと一步届かず、チームとして非常に悔しいレースとなりました。しかし、その一方でBMW M4 GT3 EVOを投入して以降、予選・決勝ともに一番手応えを感じられた大会でもありました。開幕戦から積み重ねてきたものが、今大会の今季最高位獲得に結びついていると思います。また、NACのメカニックを含めたピットクルーも非常に安定した仕事をしてくれましたし、チーム全員がそれぞれの役割をしっかりと果たしてくれました。課題はありますが、この悔しさを無駄にせず、決勝翌日のテストも含めてしっかりデータを分析し、チーム一丸となってさらに戦えるクルマへと仕上げていきます。鈴鹿では今回以上のパフォーマンスをお見せし、チーム、スポンサーの皆様、そして応援してくださるファンの皆様にポイント獲得という結果で恩返しができるよう、チーム一丸となって全力で挑みます。引き続きご声援をよろしくお願いいたします。



富林勇佑 選手

前戦の富士では厳しい面も多くありましたが、今回はこの夏のレースに向けて、ミシュランさんをはじめ、エンジニアやメカニックといったチームが新たなトライをしてくれたことで、いい流れを掴むことができました。予選でもQ1もしっかりと突破できましたし、藤原選手も本当に素晴らしいアタックをしてくれました。今までやってきたことの積み重ねと、本当にチーム全員の頑張りが予選13番手というポジション獲得に繋がったと思っています。決勝は安定したペースで走っていましたが、終盤はタイヤのグリップ力が低下し、全く防ぎきれないような状況だったので、そこは残念でした。ですが前戦までに比べると、難しいコンディションの中でも、今季初めて最後までポイント圏内で争えていたので、ポジティブなレースだったと思います。今回はポイントを獲得できなかった分、鈴鹿ではしっかりと獲得できるように、チームとしっかりミーティングをして準備をして挑みたいです。



藤原優汰 選手

今回は持ち込みのセットアップも良かったので、予選ではあまり変更することなく、少しの変更だけで挑みました。そのこともプラスに動き、4輪のタイヤをしっかりと1輪ずつ仕事をさせながら、個人的にも良いアタックができましたし、乗りやすく、安心して攻めることができました。今シーズンの中で最も戦闘力が上がっていると感じましたね。決勝ではスタートで何台か抜きたいと思いながら、できる限りのことはしましたが、ライバルとのパフォーマンスの特性が異なるため、少し辛い抜け方をしてしまいました。ただ、自分のそこからは安定して走ることができ、ピット作業もとても速く、富林選手もとても良いペースで走ってくれたことが、今季ベストリザルトに繋がったと思います。ポイント獲得まであと1歩でしたが、次の鈴鹿に向けてもいい目標ができたと思っています。次戦ではポイントを獲得できるようにしっかりと準備を進めていきたいです。



PARTNER



© Cygames, Inc.



Motorsport



SPONSOR

